

# 昔のくらしと道具展

## 「ふる里の原風景」開催にあたって (ご挨拶)

本日はご来館いただき誠にありがとうございます。

「昔」を国語辞典で引くと「経過した時間・過去の時間」などとあります。また、私たちは十年ほどの期間を「一昔」、あるいは「一昔前」と言います。

「昔は、・・・だった。」などと、今の暮らしや環境の変化などをはかる基準としたり、何よりも、昔を思い出すことで気持ちを切り替え元気を取り戻したりもしています。

昭和三十年代に羽島市の農家で育った私の子どもの頃には、庭には井戸があり「手押しポンプ」を使って水を汲んでいました。夏には水を入れたバケツを庭に並べ、夕方になると「ごえもん風呂」まで運んでいました。この庭は農繁期には家族総出で稲の脱穀をしたり、粃を天日干ししたりもする農家にとっては大切な場所でした。

オートバイで台車を引っ張って氷を配達する人を覚えています。後に知ったのですが、当時では珍しい「氷で冷やす冷蔵庫」(弊館で展示中)に入れる氷でした。

この頃の暮らしにかかわりの深い「もの」や道具は、当時ほとんどは進化の過程にありましたが、それからわずか数十年の間にさらに大きく変わってきました。

同様の変化は皆様の生活の中にも、また、羽島市やその周辺の移り変わりからも感じていただくことができます。かつての長良川の河川敷には養蚕のための桑の木が栽培されており、桑の葉を自宅の「蚕部屋」へ運ぶ家族の姿がありました。その下流から桑原町にかけてはたくさんの乳牛が放牧されていました。夏には水浴びをする牛たちも夕方になると列になって堤防を越え牛舎に戻っていきます。ここにも家族が協力して世話をする光景がありました。

今日では、太陽の光・木や炭・水等の身近な資源を使う生活から、石油や石炭などの資源を消費することでより便利で快適な生活ができるようになりましたが、その一方で、発展を支えてきた昔の暮らしと道具は、私たちの記憶の中から次第に消えようとしています。

今回の企画展では、10代の頃から活動されている羽島市出身の写真家 小川照夫 様が撮影されました昭和の頃の羽島市や岐阜県内の「ふる里の原風景」もご紹介しています。

小川様は、今もなお身近な風景や行事、暮らしを写真に撮り続けていらっしゃいます。現在ではその一枚一枚がとても貴重なものとなり、若い年代の皆様には昔を知る手がかりとしていただけます。あるいは、昭和の時代を過ごされた皆様には、家族や地域の中で過ごされたご自身の幼少期と重ねてご覧いただけることと存じます。

また、小学生、小学校団体の皆様には昔の暮らしで使われていた道具を体験を通して学んでいただくことができます。行灯の明かりと電灯の比較、手押しポンプで水を汲んで水がめまで運ぶ家族の仕事、手回しの蓄音機からレコードやCDのプレーヤなど音楽を聴くための道具の移り変わり、尋常小学校当時の二人用机や教科書を使った授業などを準備しています。

ご来館いただきました皆様におかれましては、時代が進むとともに暮らしに関わる「もの」や道具が変わり、また、その進歩や改良に合わせて私たちの暮らし方まで変化して今の便利で豊かな社会につながっていることを感じていただけたら幸いに存じます。

また、家族、人と人とのつながり、環境問題など新たな課題についても考えていただく機会となり、地域に対する愛着の念と誇りをもって新しい時代へと進んでいただけることを願っております。

最後に、この企画展の開催にあたり、「ふる里の原風景」写真をご提供いただきました写真家の小川照夫様、取材をさせていただきました正木町の畜産農家、栗本洋幸 様、今回展示しています資料をご寄贈いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

羽島市歴史民俗資料館  
羽島市映画資料館  
館長 後藤昌美